

早稲田大学社会科学部
学部生・卒業生・教職員を繋ぐ
Communication Magazine

WEB発行第12号

No.26

「社学二水会」会報
通巻26号

第26号2025年8月30日発行



社
学
稻
門
会

題字：第3代学部長
故木村時夫名誉教授

CONTENTS

ご挨拶にかえて近況報告を

「社会イノベーター人材」の育成に期待を寄せて／伏見 英敏 2

教授リレーメッセージ◎第4回

社学60年とリ・デザイン／佐藤 洋一 4

★OB・OGメッセージ★

『がんばれ！同窓生』～次世代に贈る言葉～ 第10回

「今なお、夢に向かって！」／木庭 民夫 6

「社学稻門会」報告

2025年度社学稻門会第11回総会報告／西宮 正明 8

2024年度「社学稻門会」活動報告／夏越 英成 10

2024年度奨学生紹介

防災のスペシャリストとして／汲田 知樹 12

将来は公務員を目指して／平野 啓一郎 12

国際社会で活躍できる人材に／伴野 萌香 12

点と点が繋がる学び／堀口 詠冬 12

「社学稻門会」告知

早稲田大学寄付ウェブサイトからの寄付方法について 13

「稻門祭(写真班)」について 13

寄稿・紹余曲折

社学でのエポックメーリングがすべて私の財産に!!／佐藤 哲也 14

健康社学●第5回

驚くべき背骨の重要性／碓田 拓磨 16

「社学稻門会」告知

「社会科学部同窓会2025」のご案内 20

編集後記 20

Come & join us again! Come & join us again!

ご挨拶にかえて近況報告を

社会科学部稻門会 会長
伏見 英敏
(1983年卒)

「社会イノベーター人材」 の育成に期待を寄せて

初秋の候

社会科学部稻門会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

この会報誌を手にされるころは、例年通り暑さが続く日々でしょうか。原稿を書いている7月上旬の東京は梅雨冷えに戻ったり、中旬には猛暑日が続いたり、時に激しい豪雨という状況で外出を躊躇してしまう天候続きです。

6月の総会では、大勢の方々にお集まりいただき誠にありがとうございました。日頃から会活動にご理解とご支援をいただいている皆様に心より感謝申し上げます。皆様のご厚情に支えていただき、楽しく和やかな会活動を継続して参りたいと思っています。

心のふるさと早稲田の居場所

私たちの日ごろの活動の柱のひとつは、会員相互の親睦会です。総会の時には「居場所づくり」とお話をさせていただきましたが、従来通り毎月第二水曜日を中心に、主に大隈タワー（26号館）の最上階（16階）にある校友サロンで開催しています。

毎回のように初参加の方や久しぶりの参加の方がお見えになります。話題に決まったテーマはありませんが、参加者の仕事の話、趣味の話、感動した話などで盛り上がります。また、ご自身が出演するミュージカルやロックコンサート、漫談やダンスパフォーマンスなどのご案内をいただくこともしばしば。



親睦会で校歌「都の西北」を……「集り散じて 人は変れど」♪



●伏見 英敏さんプロフィール

宮城県石巻高校出身

1983年（昭和58年）卒業。日本経済新聞社入社、現在日経イベント・プロ勤務。キャリアコンサルタント、日本健康太極拳師範。

趣味はベランダガーデニング、日本酒および日本酒に合う肴料理。

このような場を活かして、いろいろな展開を楽しむのもよろしいかと思います。例えば同好の士を募り、「昭和歌謡の会」「日本酒・ワイン愛好会」「早稲田の歴史の勉強会」「ツーリングクラブ」などなど、リーダーとして分科会を立ち上げるのも面白いでしょう。親睦会で友好の輪を広げて、早稲田に社学稻門会という「居場所」を作っていただければと思います。

後輩支援の輪を広げたい

もう一つの大きな柱は、早稲田大学および社会科学部への貢献です。その中の主要な活動が草創期の諸先輩方が立ち上げ育ててきた「社会科学部卒業生奨学基金」です。毎年大勢の皆様に多大な支援をいただき、2024年度末には大学に運用をお願いしている「基金」部分のみで1億円の大台を突破しました。

現在、毎年4名の学生に40万円の奨学金を支援していますが、さらにスケールアップする準備ができました。『経済的に困っている後輩を応援しよう』と「基金」を立ち上げられた皆様の志が同窓生や教職員の皆様の賛同を得て、30年も継続されてきたことに敬意を表します。今後も多くの方々に呼びかけ、寄付活動のすそ野を広げて参りたいと思います。

社学卒業生は3万人を超えると言われていますが、現状では社学稻門会の存在や活動そのも

のがあまり知られていません。皆様におかれましても旧知のご同輩にもお声がけいただき、誇りをもって後輩支援の輪を広げる活動にご協力をお願いいたします。

2026年は学部創設60周年

ご承知の通り社会科学部は、1966年（昭和41年）に創設され、いよいよ来年2026年は創設60周年を迎えます。高度経済成長期や60年・70年安保の疾風怒濤の時代に生まれ、人間で言えば還暦を迎える、さらなる充実期にさしかかりうとしています。

そして学部では今までに新しいカリキュラムが立ち上がりうとしています。社会科学部報69号によれば「2024年度よりコース制を導入し、現代社会の複雑な問題に『多領域の知』を結集して課題解決できる『社会イノベーター人材』の育成を目指しています」とあり、このコースの選択が2025年、今年の秋学期以降にスタートします。

創設当時の社会情勢や環境と現在は比べるべくありませんが、大きな変換期という点では似ているかもしれません。国内の政治問題やアメリカの関税問題、世界各地での紛争、気候変動、異常気象による風水害や干ばつや食糧危機など、私たちにとっても対岸の火事と言いつ切れない問題が山積しています。

そういう状況下で我々ベテラン勢も小さな努力を続けつつ、同時に「社会イノベーター人材」の卵たる社学の皆さんに10年後、20年後、30年後にいろいろな分野で活躍できるよう期待し、「社学生応援部」であり続けたいと思います。

来年の学部創設60周年では、学部とコラボした事業を検討中です。新たにどんな学生支援ができるのかを考え、実行に移す1年にしたいと思っています。多くの皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

教授リレーメッセージ○第4回

社会科学総合学術院長

佐藤 洋一



社学60年とリ・デザイン

はじめに

学術院長の佐藤洋一と申します。専門は都市の歴史と写真や映像などのヴィジュアルスタディーズです。特に東京の戦後の歴史を写真や映像資料を使いながら考える仕事をしてきました。早田宰先生から学術院長を引き継いで、9月で1年が経過します。どうぞよろしくお願ひいたします。

社学は、2026年に創設60周年を迎えます。この60年間で、社学の卒業生は、データベースの数字では29,734名。つまりほぼ約3万人。卒業生の進路は、いわゆる第二次産業、第三次産業だけでなく、農業や漁業・林業などの第一次産業に関連する分野も含め、幅広い領域にわたっているのが特徴です。3万人というと、早慶戦の行われる現在の神宮球場のキャパシティは30,969人なので、ほぼ同数です。日本の各地で、社学の卒業生に出会うことができます。人数に対し、活動の幅が広いのが社学の卒業生だと感じています。

私ごとですが、社学に来る前、2000年から2010年まで早稲田大学芸術学校という夜の専門学校に、任期付の教員として所属していました。空間映像科という新しい学科を作るところから、10年後にその科が廃止されるまでの間です。学科がなくなるということは、卒業生が帰る場所がなくなるということです。空間映像科の卒業生とは、今でも付き合いがありますが、早稲田に帰ってきても、今は自分たちの学校はない。卒業生が、後輩たちの活躍の場を見られないことは大変寂しいことです。

そんな経験もあり、学術院長としての最大かつ基本となる使命とは、ほぼ3万人の卒業生の皆さんとより強く連携し、皆さんに気軽に戻ってこられるように、社学の価値と存在感を高めていくことだと決めております。後輩のためにも、皆さんの姿を見せに、あるいはこっそりでも良いので、様子を見においでください。どう

ぞよろしくお願ひいたします。

ここでは最近の社学についてお伝えします。

1. 第二ステージに入った社学の国際化

英語プログラムTAISIを擁する社学の国際化は第二ステージに入りました。英語プログラムは、英語による授業だけで学位が取得できるもので、2013年に始まりました。すでにご存じかと思います。海外からの留学生のみならず、帰国子女の日本人学生も多く在籍し、当初の名称CJSPからTAISIと名前を変えて、すでに13年、学年定員も現在では60名となり、累計で285人の卒業生を送り出しました。この数年は出願者も大幅に増え、学生のレベルも向上し続けています。

少子化がさらに進み、TAISIの役割と重要度は高まっています。国際化の第二ステージの目標は、TAISIを軸に双方の授業を融合し、学生が対話をする場をさらに形成し、恒常的なものにしていくことです。複雑な社会課題への理解の第一歩は、対話を通して、多様なパースペクティブで捉えるなかで醸成されます。多様なバックグラウンドの学生がともに学ぶこと、対話をし続けることにより、複雑化している様々な社会課題に向き合う姿勢が身につきます。

2. 海外大学との交流が活発化

海外大学からのアポイントや来訪が大変に活発です。学問の世界には、各国間の政治的な状況を離れ、個人個人のネットワークを形成しながら議論をし、ある時にはともに研究をするというリサーチャーシップが根底にあります。円安も誘引していると思いますが、母国の政治状況を背景に、大学や学部、あるいは学的なコミュニティ単位で交流を絶やさず、むしろ活発に行おうという意思を感じます。社学もさまざまな大学や学部などと協定を締結して、短期的な交流プログラムのほか、学部生や大学院生の交換留学、さらに進めて両者の学位が取得できる

DD（ダブル・ディグリー）プログラムの検討などを行っています。

3. 大学院教育

1994年に発足した社学の大学院、社会科学研究科も30年以上が経過しました。2018年より入試改革を行い、大幅に志願者数が上がりました。現在では大学院入学者の半数以上は留学生です。情勢が不安定な米国を避けるアジア諸国からの留学生の数が増加するもっとも多いのは中国からの学生ですが、アジア諸国のみならず、アフリカやヨーロッパからの留学生も在籍しています。そして、毎年常に一定数の卒業生の方が、大学院生として早稲田に戻ってこられます。国際化が横の広がり、幅広い年齢層が学ぶことは縦の広がりを作っています。社会での経験に「知」の形を与えること、学び直しによる第二の人生のデザインに関心がある卒業生の皆さん、ぜひお待ちしております。ともに学びましょう。

4. コース制と課題研究

社学のカリキュラムの大きな変化は、コース制の導入です。社学のカリキュラムを振り返ると、さまざまな変遷がありました。「社会科学の融合」から始まり、「学際」をコンセプトにしてきましたが、これまでのものとの大きな違いは、2年秋学期から全ての学生は「平和・国際協力」「多文化社会・共生」「サステナビリティ」「コミュニティ・社会デザイン」「組織・社会イノベーション」のいずれかのコースに属するということです。その要点は、学生が、教員と、あるいは学生同士の関わり合いを深めながら、自分で課題を発見し、その問い合わせ探究していくことがあります。そこで、卒業時のプロジェクトあるいは研究論文に対して「課題研究」として4単位を付与します。卒論や卒プロはこれまで「ゼミナール」の活動の中でのものでしたが、社学としてそれらの成果促進をオーソライズする形になります。私としては学生たちの成果を社会に還元していくべきだと考えており、卒業論文や卒業プロジェクトを、同窓会の皆さんにも見ていただき、社学の今を学んでいただけるような形にできないかと考えています。

5. 60周年とり・デザイン

そして最後に社学の拠点、14号館のリ・デザインです。1998年の竣工以来、14号館とともに拠点を置く教育学部が、現在建設中のE棟に2027年に移転することに伴って、空間利用

●佐藤 洋一先生プロフィール

1990年、早稲田大学理工学部建築学科卒
早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修了
博士（工学）

2010年4月～早稲田大学社会科学総合学術院教授
主な研究テーマ：都市史、ビジュアルアーカイブ、占領期の東京に関する研究

著書：『占領期カラー写真を読む』（共著・岩波新書）、『図説占領下の東京』（河出書房新社）、『米軍が見た東京 1945 秋——終わりの風景、はじまりの風景』（洋泉社）ほか多数。

を見直す好機が到来しています。そのため、教育研究環境の再構築、新たなコモンスペースの創出などを行うために活動を開始しました。災害時における大学構内の対応に関する事例の視察、学生とも連携したアイデアコンペや、空間利用に関する学生アンケートなども行いながら、教室及びコモンスペース等での新たな空間利用の検討を進めています。学生・教職員はもちろんのこと、卒業生の方も気軽に遊びにきて、顔を出せるような場の創出を目指しています。

終わりに

今後とも大事にしていきたいのは社学のつながりです。同窓会（社学同窓会）による独自の奨学金制度（早稲田大学社会科学部卒業生奨学金）はその象徴であり、この場を借りて改めて御礼申し上げます。今後はさらに次のフェーズに進み、学術院と一体となって、社学の価値向上に向けた取り組みができると思います。新しい支援の形を模索し、提案したいと思います。

繰り返しになりますが、最後にみなさんにお願いがあります。それは、ぜひ大学に戻ってきてほしいということです。ゼミやサークルの後輩と話をする、就職の相談に乗る、あるいは卒業式のタイミングで14号館を覗いてみる、そうしたカジュアルな形で大学とのつながりを保っていただければと思います。その上で、社学のリ・デザインにぜひご参画いただきたいと思います。

社学の60年史は、よくなり続ける歴史でした。みなさんが卒業した時よりも、社学が良くなっているかどうか、ぜひ確認しにきて欲しいのです。そして〇〇年振りの社学に対して、ご批評・ご批判いただきたいと思います。大学は、知を共有する場であり、切磋琢磨を続けることで、その価値を高めてきました。社学のつながりを、皆さんでさらに醸成していきましょう。

★OB・OGメッセージ★
『がんばれ！同志生』～次世代に贈る言葉～
第10回

「今なお、夢に向かって！」

映画プロデューサー
木庭 民夫(1983年卒)

●グリークラブそして三朝庵でアルバイトを

今、改めて、社会科学部の教育理念をHPで見ると『社会科学の学際的・国際的・臨床的な研究・教育』を基本理念として、多領域の知を結集して問題解決する能力と社会を切り拓く社会構想力を身につける」云々と記してあります。

私が社学に入学したのは1978年。「青春の門」(五木寛之著)を読み、別れを惜しむ両親に見送られながらブルートレインに乗り、故郷・熊本から東京へ。怖いもの知らず、見るもの全てがキラキラと輝いていて、夢に溢れた青春時代だったように思います。

そして、新入生への勧誘でグリークラブへ。尊敬すべき先輩に囲まれていましたが、事情があり3ヶ月で部活は卒業。その後、1年間、大隈重信侯御用達の蕎麦屋「三朝庵」でアルバイト。江戸っ子のご主人夫婦や女将さんに、温かい声をかけてもらいながらの日々でした。その後もアルバイトを重ね、生活費を稼ぐためだったとはいえ、今にして思えば、もう少し学業優先の日々を送れば良かった、と反省しているところです。

●あごひげ姿の田村正勝先生に魅了され…

そんな私の心に深く残っているのは、田村正勝先生の「社会科学原論」の講義です。田村先生の経歴を見ると、当時、田村先生は、まだ30代だったようですが、あごひげ姿がお似合いで、その姿から発せられる熱気に満ちた「社会科学」の世界に魅せられたのを覚えています。入試に臨む前から、社学の理念に賛同していたためでもあると思います。

そして、大学4年の終わり頃、ふと気が付くと取得した単位が足りずに留年。改めて、早朝から時事通信社で外電の文字起こしなどのアル

バイトをしながら、大学に足繁く通いました。

●テレビマンとして東奔西走の日々を

卒業後、テレビ朝日関連の番組制作会社に入社。バブル全盛で、テレビ局も景気の良い時代。「ミュージックステーション」「トウナイト」「プレステージ」などの生放送が続くスタジオを横目に、徹夜続きだった日々。日中は、「放送大学」実験番組制作のため、幕張(千葉)のスタジオへ。旅番組のロケで全国を回ったこともあります。

31歳、経験者採用として名古屋テレビ放送(テレビ朝日系)に入社。300名の社員が取り仕切る準キー局のテレビ局、自由奔放でありながらもメディアとしての責任の重さを担うテレビ局の仕事に奔走しました。

再び東京に戻ったのは、1995年、36歳の時、東京最後の地上波テレビ局として開局した東京メトロポリタンテレビジョン(株)(現在のTOKYO MX)に入社し、62歳まで勤務。東京都や東京商工会議所、ソニー、鹿島、東京新聞などが株主ではあるものの、民間テレビ局として、バブル崩壊後の東京の厳しい状況下での奮闘が続きました。

●還暦過ぎに映画「骨なし灯籠」をプロデュース！

社会科学部とは、早稲田大学とは、大学生生活とは、いったい何だったのか。思えば、42年も前のことです。逆に言えば、大学を卒業してから、アッという間に42年の年月が経ってしまったということに唖然とします。光陰矢の如し。それほど、心身ともに仕事に費やしてきたサラリーマン生活が長かったということになります。若い頃は、「可能性は無限大」「将来の時間は無尽蔵にある」と信じて疑いませんでしたが、一概にそうではないことに気がついたのは、還暦を超えて、定年退職をした後のことでした。

●木庭 民夫さんプロフィール

熊本出身。1983年卒業。テレビ朝日系の番組制作会社を経て、名古屋テレビ放送。1995年、開局時のTOKYO MXに入社。編成部長、総務部長、事業局長などを経て執行役員。2021年に退職し、故郷・熊本に移住。山鹿市で映画「骨なし灯籠」を製作して配給、全国順次公開中。現在、国指定重要文化財の芝居小屋「八千代座」で働きながら、映画「骨なし灯籠」のプロデューサーを務める。将来、山鹿にミニシアターを創り、新たな文化発信、人的交流の拠点にできればとの夢を持つ。



脚本・監督の木庭撫子さんと（恵比寿ガーデンシネマ 2025年）

今、私は、長年住み慣れた東京を後にし、故郷・熊本に移住。居を構えたのは、馴染みのある熊本市ではなく、熊本県北部の山鹿やまがという温泉町。亡き父の生まれ故郷ではあるものの、住んだこともなく、知り合いもいない新しい土地です。先祖が暮らしてきた築150年の古民家を再生し、暮らし始めて1年後、脚本家の妻が「山鹿を舞台にした映画の脚本を書いた」と言うので驚きました。そして、私共夫婦は、コロナ禍で世の中が騒がしい中、「骨なし灯籠」というタイトルの映画の撮影をスタートしたのです。

脚本・監督は妻の木庭撫子（倉本聰氏主宰「富良野塾」出身）が務めました。山鹿には「山鹿灯籠」という伝統工芸品があり、骨組みがなく、和紙と糊だけで作られるので「骨なし灯籠」という別名があります。この映画は、妻を亡くした男が骨壺を抱えて山鹿にたどり着き、人の優しさに触れながら再生していく物語です。私共は、糸余曲折を経て1年後に映画を完成。おかげさまで、トロント国際女性映画祭で初監督賞、オランダのチネチッタ国際映画祭で観客賞を受賞するなどして、現在、全国順次公開中です。

連載企画★『がんばれ！同窓生』



撮影中のツーショット（2022年）



あいち国際女性映画祭（2023年）

●「また明日」があると信じて「青春真っ只中」！

改めて思うのは「人生、どうなるか誰にも予測できない」ということです。これは、良い意味でも悪い意味でも。順風満帆に見えた人生が、いつどん底に落ちるか分からぬ。逆に、ダメダメな人生が、いつ、遅咲きの大輪を咲かせるか分からぬ。会社勤めを終え、年金生活に入り、いつボケてしまうかも分からぬ。人生は、ただ一度だけ。自分の人生を悔いなく生き抜くのか否か。それは、その人の選択によります。

私は今、「熊本やまが映画プロジェクト」という任意団体を設立し、独立採算で、理想とする映画を製作し、配給しています。亀のような歩みではありますが、一歩一歩、その映画に込めた想いを、映画館を行脚しながら、全国の皆さん的心に届けています。大きな映画会社の傘下にいる訳ではないので、資金のやり繕いなどは大変ですが、志は高く。

詩人サミュエル・ウルマンは『青春の詩』の中で「人は希望を失った時に老いる」と詠みました。私は、今年67歳になりますが、心は「青春真っ只中」です。たったひとつの人生、諦めず、命絶えるその時まで、光り輝いていたい。疲れて寝ても、「また明日」があると信じて。

2025年度社学稻門会第11回総会報告

1982年卒

西宮 正明

つい先日に終了したと思った総会ですが、あっという間に今年の総会となりました。社会科学部稻門会第11回総会は、昨年度と同日の6月14日に早稲田大学14号館102の大教室を舞台に盛大に行われました。

●創部60周年記念事業に向けて…

当時は、佐藤社会科学総合学術院長、矢古宇事務長をご来賓に、学部創設期に入学された卒業生をはじめ多数の方が参加されました。昨年同様、司会の1991年卒業の後藤秀一氏から式次第が案内され、伏見会長からの挨拶から始まりました。

一期生のお声がけから始まった社会科学部卒業生奨学金基金が1億円を超え、今後の運用、運営についての展望が案内されました。また、来年はいよいよ社学創設60周年を迎え、大学とも協働しながらの記念事業を検討している事などが紹介されました。

さらに、ご来賓を代表して佐藤学部長からご挨拶を頂戴し、最近の社会科学部の人気ぶりやコース別の教科設定、60周年に向けての記念事業に関連した今後の14号館の在り方などの構想について紹介されました。

その後議事に移り、活動報告、決算報告、監査報告、予算案、活動計画などの報告がなされ、何れも承認されました。続いて、夏越副会長からは学部創設60周年記念事業に向けた構想の一部紹介、及びそれに向けての稻門会全員への協力依頼があり、第一部を終了しました。



佐藤洋一学部長からは今後の14号館の在り方などの構想も

●西宮 正明さんプロフィール

卒 年：1982年（昭和57年）
出身校：愛知県私立岡崎城西高等学校
ゼ ミ：大西泰博ゼミ「財産法の基本問題」
長年に渡り、日系・外資系メーカーにて消費財マーケティングにかかわる

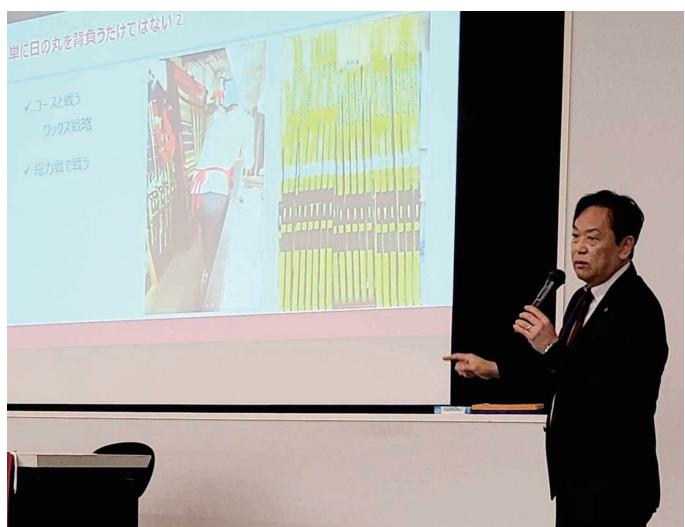
●元スキーパー監督・倉田秀道氏による記念講演

第二部では、早実から早稲田大学時代を通じてスキーパーに在籍し、'84年に卒業された倉田秀道様から講演を頂戴しました。

スキーパー監督に就任され、長きに渡り凋落していたスキーパーを40年振りのインカレ優勝までに導くなどの功績もさることながら、2014年ソチオリンピックには渡部曉斗を始め、スキーパーOB4人、現役部員2人を日本代表として送り込まれました。また、世界大会とインカレの優先度についての先輩OBとの確執や、障がい者である村岡桃佳選手の入部の際の秘話など大変興味深い講演を頂戴しました。

とりわけ、早稲田大学大学院スポーツ科学研究修士課程に学ばれた際の、元巨人のエース桑田真澄氏や、元横綱の稀勢の里のお話や、ラグビー部の清宮元監督、駅伝の渡辺元監督をはじめ、監督の目から見た各監督の選手指導のタイプ分析なども興味深い内容でした。

倉田様は上智大学の客員教授などの要職にも就かれており、日本のスキーワールドの発展のみならず、今後の益々のご活躍が期待されます。



元スキーパー監督・倉田秀道氏の記念講演は興味深い内容満載で…



14号館 102の大教室にて参加者全員の記念写真を撮影

●「高田牧舎」にて懇親会で盛り上がり無事終了

第一部、第二部終了後には、参加者全員の記念写真を撮影し、場所を南門前の高田牧舎へと場所を移動しました。懇親会の始まりです。

伏見会長の乾杯のご発声から始まり、貸し切りとなった高田牧舎には、沖縄の遠方から参加された大先輩も参加され、多いに盛り上りました。

会の締めは、元応援部リーダーの夏越副会長のエー

ルにより右手を高らかに校歌の大合唱。各人のお顔を見ながら「集まり参じて人は変われど」を実感しながら、盛況のうちに懇親会が終了しました。

社会科学部稲門会では、今後も定例会をはじめ様々な企画をご案内します。先輩・後輩・同期のご友人にもお声がけいただき、是非ご参加下さい。60周年記念事業へのご支援なども含め、稲門会でお会いしましょう。



懇親会場の「高田牧舎」にて集合写真

2024年度「社学稻門会」活動報告

副会長・幹事長
夏越 英成
 (1984年卒)

●月次定例会中心+企画イベント開催

社学稻門会は嘗ての二水会発足から 30 周年を 2024 年に迎え、10 月に記念のイベントを実施しました。

当日に作家の伊東潤氏に「変革期の風雲児 大隈重信」と題して記念講演を頂きました。

定例会には昨年より現役学生が 10 数名参加頂き、大隈タワー 26 階の校友サロンで近況報告と相互情報交換を毎月実施中です。

定例会は 2 週間前に稻門会 HP で「定例会」のご案内をしております。



作家の伊東潤氏による記念講演

●シーズンイベント開催

シーズンイベントとして早慶レガッタ・早慶野球戦を観戦、ラグビー早慶戦観戦、社ガールの企画も春と秋に各 1 回実施して通常では聞けない情報を伺いました。

秋の稻門祭では恒例の 1 号館前特設テント前にて大



月次定例会（第 2 水曜日）

●夏越 英成さんプロフィール

1980 年一橋学院早慶外語経由で入学、1984 年卒。

大畠弥七ゼミ「国際貿易論の研究」15 期生。

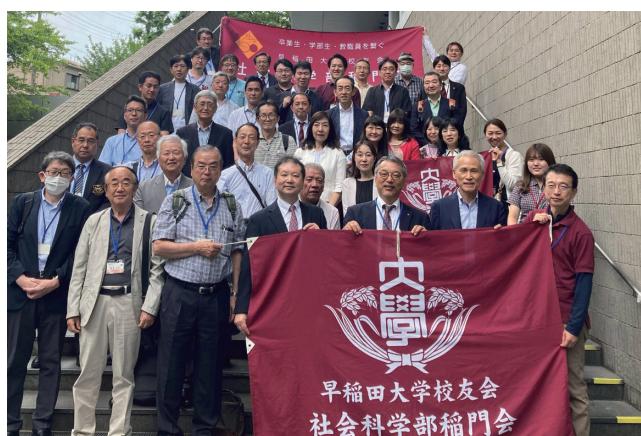
昭和 58 年度早稲田大学応援部副将、応援部稻門会学年幹事。

隈講堂をバックにした記念写真の撮影・販売を @ 1,000 円で実施、当日の益金は社会科学部奨学金基金に寄付しています。

1 月の早稲田駅伝では OB・OG と現役で 1.6km の区間を襷リレーにて完走出来ました。



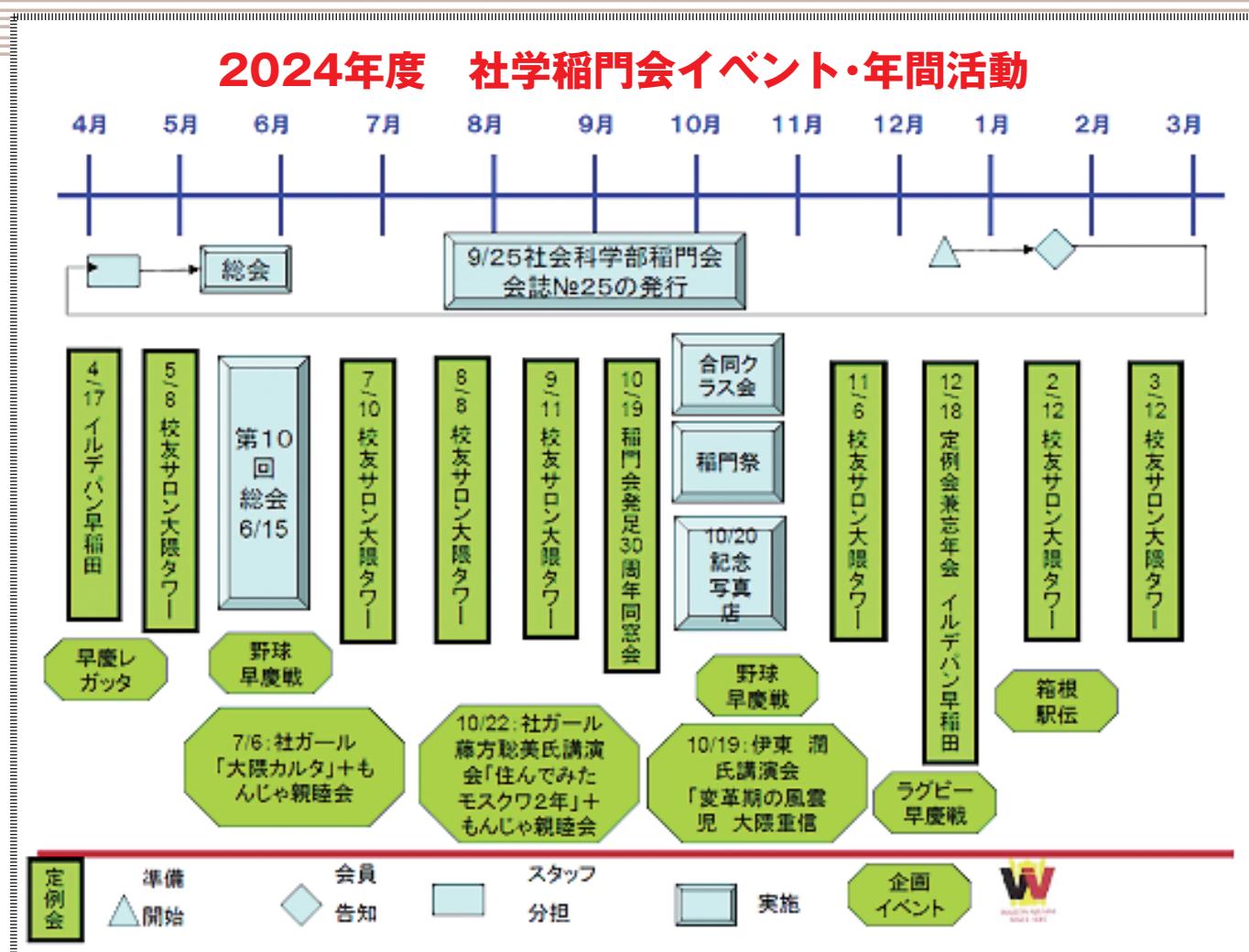
稻門祭での記念写真班は毎年元気いっぱい大活躍



社学稻門会発足 30 周年記念撮影

SHAGAKU INFORMATION

2024年度 社学稻門会イベント・年間活動



早慶戦観戦イベントにて

●学部創設60周年記念事業の開催に向けて

2026年10月に社会科学部は創設60周年を迎えます。

その記念イベントについて、稻門会として60周年記念実行委員会を組織して、学部との協議を開始しております。



早稲田駅伝ではOB・OGと現役で完走

2024年11月に学部が現役学生に向けた「リ・デザイン14号館」の提案募集の応募結果を学部当局から受け継いで学部創設60周年記念事業の一環として具現化に向けて社学稻門会として活動します。

定例会に自由に出席頂き、懐かしい学び舎で現役支援等の意見をお願いできれば幸甚です。

2024年度奨学生紹介

くみた
汲田 知樹 (4年生)

防災のスペシャリストとして

このたびは、社会科学部卒業生奨学金にご採用いただき、誠にありがとうございました。社会科学部の先輩方による温かなご支援に、心より感謝申し上げます。

私が社会科学部に最も惹かれた点は、その学際性にあります。さまざまな授業を履修でき、そこで得た知識が学問分野を横断してつながる瞬間は、社会科学部ならではの貴重な経験でした。学業以外では、「資格ゲッターズ」というサークルで幹事長を務めました。公認サークルを運営する難しさや責任の重さを感じると同時に、仲間たちが資格勉強に熱心に取り組む姿勢に、日々刺激を受けていました。私自身は、幼いころからの憧れだった気象予報士の資格を取得することができました。

将来は、気象予報士の資格を活かす道を志しています。「気象防災アドバイザー」という、気象予報士が地方公共団体などで防災のスペシャリストとして活躍するための研修制度があり、来年度の受講を検討しています。社会科学部で得た学びを今後も活かしながら、挑戦を続けてまいります。

出身高校：私立武蔵高等学校
所属サークル：資格ゲッターズ



平野 啓一郎 (3年生) 将来は公務員を目指して

このたびは社会科学部卒業生奨学金に採用いただき、ありがとうございます。

私は入学以来、授業の選択の自由度が高いという社会科学部のメリットを最大限に活かし、経済学を中心に学んできました。大学に入って初めてこれを学びたいという学問ができ、とても幸せに思います。ゼミナールは笠島洋一先生の「制度設計の経済学」というところに所属しています。従来の経済学とは異なる最先端の分野なので、学んでいて新鮮さを覚えることばかりです。

サークルはちょこ Let's というバドミントンサークルに所属しており、学問同様こちらでも充実した日々を送ることができます。

将来は公務員を目指しており、今まで学んできた経済学の知識を活かして国や自治体に貢献していきたいと考えています。

いただいた支援に感謝し、これからも精進してまいりたいと思います。

卒業高校：早稲田高等学校
所属サークル：ちょこ Let's
所属ゼミ：制度設計の経済学



くみた
伴野 萌香 (2年生)

国際社会で活躍できる人材に

この度は社会科学部卒業生奨学金に採用していただき誠にありがとうございます。

現在は、社会科学部カリキュラムの特徴である学際性を活かし、経営、法律、文化など幅広い分野にわたる学問に取り組み、合わせて他学部の授業も履修して、理解を深めています。

特に韓国文化には強い関心を持っており、韓国文化や日韓関係について学び、副専攻としてコリア研究を修了することを目指しています。また、課外活動として日韓交流団体に所属し、日本・韓国の学生との交流を通じて異文化理解を深めるとともに、自分とは異なる意見も尊重し、対話する力を育んでいます。

さらに、秋学期からは多文化社会の会話研究というゼミナールに所属予定であり、新たに社会言語学という分野に挑戦し、多言語多文化社会の会話について研究してまいります。

このような、大学、課外活動での学びから今後とも国際的な視野を養い、将来は国際社会で活躍できる人材になりたいです。

出身高校：浜松日体高等学校
所属団体：日韓学生会議



堀口 詠冬 (2年生) 点と点が繋がる学び

社会科学部に入学した当初、私は正直何を専門的に学びたいか明確でなく、ただ漠然と経営学について学ぼうと考えていました。

しかし、この1年半の学際的な様々な学びの中で、過去から現在に至るまでの日本の状況や他国との関わりを、政治、経済、文化といった多くの側面から知ることができました。

社会科学部で学ぶ全ての内容がどこかで関連しあっており、点と点が線で結ばれる経験そのものが大学で得た最も大きな学びとなっています。

秋学期からは公共文化研究の小長谷ゼミナールに所属することも決定しており、文化の側面から社会科学に対する理解をさらに深めていきたいと考えています。また、学業に励む一方で少林寺拳法部にも所属し、結果を残し続けられる組織づくりを目標に練習に励んでいます。

今後も幅広い学びを通して多角的な視点を養うと共に、部活動で組織として成長する力を身につけ、社会に価値を提供できる人間になりたいです。

出身高校：ルーテル学院高校
部活動：少林寺拳法部



早稲田大学寄付ウェブサイトからの寄付方法について

①本学寄付ウェブサイト (<https://kifu.waseda.jp/>)

へアクセス

二次元バーコード→

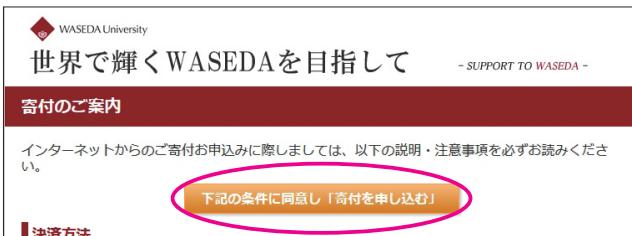


(PC・スマートフォンよりご利用いただけます。)

②トップページ右上にある「寄付する」をクリック



③注意事項を確認して「寄付を申し込む」をクリック



④寄付の種類「奨学生」、指定先「社会科学部卒業生奨学生」を指定し、その金額や氏名、住所等の必要事項を入力のうえ、「入力内容確認へ」をクリック

WASEDA University
世界で輝く WASEDA を目指して - SUPPORT TO WASEDA -

寄付お申込み 入力画面

STEP1 申込入力 STEP2 確認画面 STEP3 完了

寄付情報入力

申込者区分 個人

※ 寄付の種類 奨学生

※ 指定先 社会科学部卒業生奨学生

以下の中から寄付方法を一つ選択し、寄付金額を入力してください

◎ 今回のみ寄付 10,000円

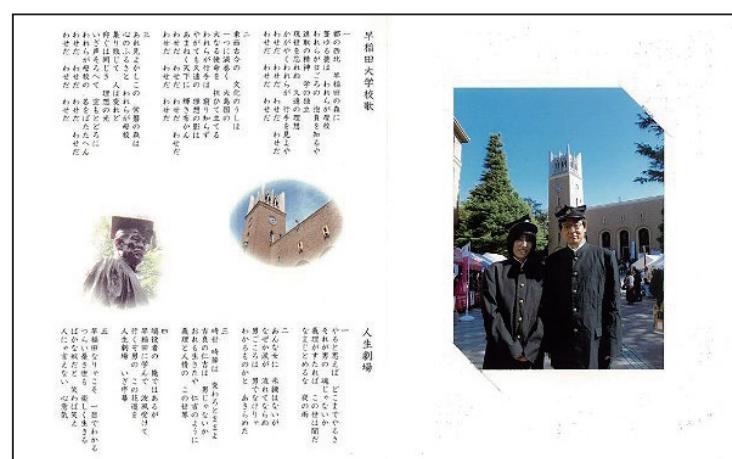
◎ 毎月寄付する 3,000円

◎ 每年寄付する 10,000円

⑤入力内容を確認した後、「お申し込み」をクリックして、手続きは終了です。

「稻門祭(写真班)」について

10月19日(日) 9:00 ~ 15:00 の間でお手伝いできる方は、正門前の社会科学部稻門会テント前まで直接お越しください。
売上金は奨学生として寄付させていただきます。(※当日のテント代等の経費を除く)



寄稿

糸余曲折

人生いろいろ…
社会科学もさまざま

社会科学でのエポックメーリング がすべて私の財産に!!

佐藤 哲也 (1997年卒)



●社会人で早稲田大学に学士入学

社会科学部、及び大学院アジア太平洋研究科卒業(修了)の佐藤哲也と申します。

昨年まで東京新聞編集局写真部の記者をしていました。2024年9月に65歳となり、再雇用を含め定年を迎えるました。5年間の外資系商社と36年間の新聞社勤務を含めると、41年間の社会人生活でした。

1995年、35歳で社会科学部に入学しました。既に社会人として新聞社に勤務していました。入試は、4年制大学を卒業した者を対象にした学士入学（3年次入学）です。受験日は一般入試と同じでしたが、受験科目が、英語、第2外国語、論文などでした。

早稲田を選んだのは、同僚の実に7割が早大出身者だったからです。当時、新聞各社の編集局は「原稿用紙を投げると早稲田に当たる」といわれるほどでした。なにかにつけ早大の話ができることもあり「なんか、おもしろそう……」と思っていました。そんな単純な理由で早大に興味を持ちました。理系出身だったので、文系への憧れもありました。

●社会科学部で得た大きな財産

社会科学の「同級生」は、私より15歳も年下でした。それでもみなさんフレンドリーで、交流はいまも続いている。入学当時10数年ぶりの「大学生」に戻り、授業やゼミは楽しく「勉学の楽しさ」を感じました。最初の大学は工学部だったので理系です。社会科学で初めて文系の世界を経験しました。そのギャップは大きく、実に新鮮でした。講義やゼミに加え、若い仲間との交流から、いろいろなことを学びました。その学びは、心の中に与えられた大きな財産です。その思いは今なお変わりません。

ゼミは「社会保障法」で久塚純一教授でした。社会保障に関心が強かったわけではありません。当時、東京新聞社会面で「学習障害児（LD児）」の連載を担当していました。日本と世界の社会保障のあり方、違いに興味を持っていました。それで社会保障法のゼミを選択しました。

文系のゼミは（理系と違い）実験がありません。また研究室で自分のデスクを持つこともありません。自分のデスクを持てるのは、大学院生になってからでした。このあたりは文理の違いなのでしょう。

授業は昼夜開講だったので、仕事を終えてから授業を受けることができたのは幸いです。

17時からの「夜勤（泊まり勤務）」の日は、昼間の授業。14時に「夜勤明け（泊まり明け）」が終わる日は、午後から夜の授業。曜日によって通学や履修の制約がありました。なんとか2年間で卒業できました。元の大学の一般教養の単位がかなり認められたので、必要なのは84単位でした。最終的に100単位で卒業しました。

●社会科学でのエポックメーリング

思い出はたくさんあります。所属した「社会保障法」ゼミの久塚純一先生と学生らとは、夕方のゼミが終わると毎週のように酒盛りに。「社会科学方法論」の田村正勝先生の講義では、自由と平等の相反する視点に驚きました。「憲法」の西原博史先生とは、私と意見の食い違いで口論となつたことも。「平和学」の多賀秀敏先生の先進的な視点は、今も時代を超えたものがあると思っています。「英書研究」の富田清美先生の授業に出張などで出られないときは、FAXで英文和



訳を送り「出席」扱いにしていただいたり……。

どれも数え切れないほどのエポックがありました。どのエピソードも懐かしく、思い出深いものがあります。全てが私の心の財産です。

●指導教官不在の大学院生に

1997年に早大を卒業し、1年が過ぎたころです。

楽しかった「大学生生活」も終え、日々の取材で忙しくしていました。今思えば、それはそれで充実していたのでしょう。仕事と大学の兼業を2年も経験すると、学業がなくなると「なにかもの足りない」気分でした。社学では授業を受けることで、自分がリフレッシュすることができたと思います。

次のステージでは「学問を自分で創造することで、新たな発見ができるかもしれない」と考えました。そこで大学院の研究科を探しました。社学で勉強した社会保障ではなく、物事の「見方」「考え方」を研究したいと考えました。普遍的な「システム思考」を研究できる研究室を探しました。

探し当てたのは、大学院アジア太平洋研究科国際経営学専攻の、五百井清右衛門教授の研究室です。理工学部とアジア太平洋研究科を兼務する数学者でした。社学の話と大きくかけ離れるので詳しくは割愛しますが、要するに「目に見えない物事の関係性を可視化する」研究です。

大学院に合格し、五百井研究室に所属することになりました。ところが1年経ったころ、残念ながら五百井先生は持病で急逝されました。五百井研には助教授(准教授)や助手(助教)がいませんでした。同じような研究分野の先生がいないので、型式だけ他の研究室に所属することに。

結果的に指導教官不在のまま、査読付き論文(修士論文の提出条件として1本以上必要)と、修士論文を仕上げました。

修士論文の修了プレゼン(口頭試問)は、研究分野と異なる経営学系の先生らの前で行うことに。プレゼンに指導教官がないのは、とても残念でした。ですが早大の自由で権威的ではない先生方に助けられ、合格となりました。学位は修士(国際経営学)MBAです。

●最初の東京工芸大学工学部画像工学科とは?

1978年、最初の大学となる東京工芸大学工学部画像工学科に入学しました。

ここでは写真技術ともいえる「写真工学」「印刷工学」を学びました。現代でいうところの「画像処理」のはしりでした。私にとっては、36年間のフォトジャーナリスト人生の始まりともいえます。

●佐藤哲也さんプロフィール

1959年、北海道小樽市生まれ

1984年、東京工芸大学工学部画像工学科卒業

1997年、早稲田大学社会科学部社会科学科卒業

2001年、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

国際経営学専攻修士課程修了

外資系商社商社を経て、東京新聞編集局写真部に勤務。写真部デスク、写真部次長を経て定年退職(2024年)

JPS(日本写真家協会)会員

連絡先 E-mail: techan@mac.com

ナリスト人生の始まりともいえます。

画像工学科では「写真の印刷適性」を研究しました。どんなに素晴らしい写真を製作しても、印刷物に変換された時点で階調が失われます。どのような写真画像であれば、最終的に「印刷物でも階調豊かな写真を再現できるか」という研究です。この経験は、東京新聞写真部に勤務していた際、画像処理やゲラのチェックなどでとても役に立ちました。

●マドリード暮らしを経て大学に復学

工芸大工学部は2年次を終えて休学し、2年ほどスペイン・マドリードのアパートで暮らしました。目的はスペイン全土をテーマにした写真集を作るためです。実際には社会人になって、撮り足りないカットを少しづつ補うことに。フィルムカメラのライカ M3・M4とコダクローム PKM(コダックのポジカラーフィルム)を手に、街角や村で市井のスナップショットを撮り続けました。

帰国し3年次に復学しましたが、同期は既に卒業していました。少し寂しい思いをしました。工芸大工学部の1・2年次はスペインへの渡航費用捻出のアルバイトもあり、あまり豊かな学生生活とはいませんでした。3・4年次では、前出の「写真の印刷適性」を研究し、その後の仕事に役立つことに。

●外資系商社から東京新聞写真部へ

社会人生活では、5年ほど外資系商社(スウェーデン製中判カメラのハッセルブラッド、ドイツ製大判カメラのリンホフなどの正規輸入代理店)を経験し、中日新聞東京本社(東京新聞/東京中日スポーツ)に転職。配属は名古屋本社編集局、東京本社編集局写真部、大阪支社編集部、再び東京本社編集局写真部でした。

この間の一般取材は、阪神・淡路大震災、オウム事件、政治関連、国会、首相官邸、事件事故、経済もの、ヘリや小型機からの空撮、皇室の代表撮影、芸能関連など。



スポーツ取材では、プロ野球（キャンプも含む）、サッカー、陸上競技、駅伝、大相撲、中央競馬、ワインタースポーツ、F-1（主に欧州GP）、MLB（米大リーグ）など。

その後、写真部デスク、写真部次長を経て東京新聞の「特報面」を担当。ニュースの「背景」を取材しました。

●スペインの「愛」を記録した写真集を出版

先に記した写真集は『スペイン ひと・まち・ひと』（新潮社：2022年）として出版しました。写真集は1980年代からスペイン各地で出会った人びとのスナップショット集です。市井の人たちが暮らしの中で垣間見せる喜びや空気感、街角のたたずまいなど。さりげない瞬間を記録しました。

80年代のスペインは、意外なことに学生運動が盛んでした。マドリード大学の構内では「立て看板」が乱立していました。首都に限らず、地方でも街角の壁面には「NO OTAN」と記されたNATO（北大西洋条約機構）加盟に反対するポスターが貼られていました（現在は加盟）。

若者を含め、学生を中心とした若者や市民が政治に関心を強く持っていました。まるで1960～70年代の日本のことでした。

拙著は世界情勢が緊張をはらむ昨今「人間が生む愛を写真集で展開することで、わずかでも安らぎを覚えていただければ」と考えました。

写真集『スペイン ひと・まち・ひと』（新潮社）は、「早稲田学報（2023年12月号）」でも紹介していただきました。書評は、私が勤務していた東京新聞の文化部長で編集委員の井上幸一記者に執筆をお願いしま

著書：写真集『スペイン ひと・まち・ひと』（新潮社：2022年）



※写真集ご希望の方は、プロフィール欄のEmailまで連絡をお願いします。

した。彼も早大教育学部出身です。

●次の目標は故郷「小樽」をテーマに写真集を

2024年に定年を迎えたことは、冒頭に記しました。現在は、いわゆる年金生活者です。とりあえず「時間」はあるので、次の目標を計画しています。

故郷・北海道の「小樽」をテーマに写真集を出版しようと考えています。ローカルなテーマなので、スペインの写真集のように出版できるかは未知数です。

小樽は、写真を始めた中学生のころから撮影しています。1978年、18歳のとき。高校3年次にアサヒカメラ（朝日新聞社のカメラ雑誌）に、タイトル「小樽」を4枚ほど掲載していただきました。これを機に帰省のたびに小樽を撮り続けています。

感覚的には、85%くらい撮影完了しています。残り15%を、あと1・2年で達成するのが当面の目標です。写真集全体のイメージはできているので、あと一歩です。今年の9月末に66歳を迎ますが、健康だけには注意して目標にチャレンジしたいと思います。



南スペイン・アルプハーラ地方の山小屋



夜更けのアテカ村（サラゴサ県）



欧洲のF1グランプリ、米大リーグなどを取材してきた腕利きの東京新聞カメラマンが、学生時代からスペインを何度も訪れ撮影してきたスナップをまとめた。

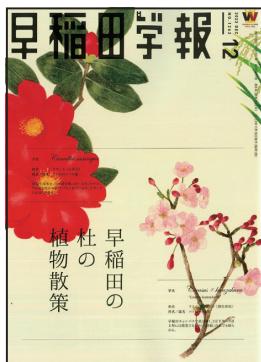
セルバンテス、ピカソ、ガウディー、世界的な文学者、芸術家を輩出したスペイン。「どこか不思議な国」と感じていた著者は、大学を休学し、2年間、この国の各地を旅してシャツを切り続けた。「市井の人々の愛にあふれた表情抜きに、この国の魅力は表現できない」と話し、壮年になるまで足を運び続ける。

井上幸一（1989年教育）

柔らかい色合いを出すカラー

フィルムで切り取ったのは、ベンチや酒場でくつろぎ、パンを抱えて歩く日常の市民の姿。写す側と、写される側の会話が聞こえてくるような温かい写真ばかりだ。

サグラダ・アミリア聖堂といった、スペインを象徴する建築物は出てこない。だからこそ、この国の本質、そして、著者の言う人々の「愛」が、1冊を通してじんわりと伝わってくる。



写真集 スペイン ひと・まち・ひと
佐藤哲也(1997年社学、2001年アジア研修)
新潮社
3,300円(税込)

右上：「早稲田学報（2023年12月号）」の表紙、上：掲載された本文



雨のマドリード



マドリードのバルで酒盛りする人ら



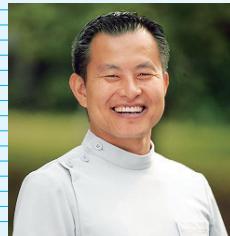
冬のマドリード（年に1・2回しか降らない雪など）



バジャヤドリッドの壁面ポスター

健康社学

第5回



1992年卒
確田 拓磨
(カイロプラクター)



「健康寿命を延ばす！
長生き姿勢」(かざひの文庫)

驚くべき背骨の重要性 ～姿勢と背骨の関係～

皆さんは、家の「柱」を見たことがありますか？どんなに立派な屋根があっても、柱が傾けば家全体が歪みます。実は、人の体にも「柱」があります。それが**背骨**です。

最近では、スマートフォンを見ながら歩いたり、長時間パソコン作業を続けたりする人が増えています。うつむいたままの姿勢が続けば、気づかぬうちに背骨に負担がかかり、さまざまな不調の原因となってしまうのです。



●確田 拓磨さんプロフィール

長野県出身。早稲田大学在学中保健体育科目「姿勢と健康」を受講し、悩み続けた慢性の肩こりが劇的に解消。1992年社学卒業後、米国に留学しドクター・オブ・カイロプラクティックの学位取得。2002年虎ノ門カイロプラクティック院開業、同年「姿勢と健康」の2代目講師就任。2022年早稲田祭の企画で「早稲田一受けたい授業」に選出。「肩こり・腰痛の根本的解決、メンタルヘルス」をテーマにした講演は健康経営に関心のある企業から引き合い多数。

●カイロプラクティックの視点から見た背骨

私が学んだ「カイロプラクティック」は、1895年にアメリカ・アイオワ州で生まれた、**背骨のケアを専門とするヘルスケア**です。日本ではまだ馴染みが薄いかもしれません、世界中で広く知られており、WHO（世界保健機関）も医療行為として認めてる分野です。

私はアメリカで最も歴史のある「パーマーカイロプラクティック大学」で人体解剖やレントゲン実習など、解剖学から神経学、生理学まで徹底的に学び、ドクター・オブ・カイロプラクティック（DC）の学位を取得しました。日本に200名ほどしかいないこの資格を持つカイロプラクターとして、24年間、延べ3万人以上の背骨と向き合ってきました。

●背骨は「支える・守る・伝える」3つの大役を担う

背骨には驚くべき役割が詰まっています。私は患者さんにこう伝えます――

「背骨はあなたの体を支える“高層ビルの柱”です」と。事実として、**背骨は上半身を支える唯一の柱**です。たとえば大黒柱が傾けば、家は不安定になりますよね。人間の体も同じで、背骨の歪みは、全身のバランスを崩す原因になります。

整 座



キャットレッチ



さらに、背骨の中には脳からつながる**神経の束=脊髓**が通っており、背骨はその大切な神経を守る「**鎧**」のような役割を担っています。神経は、内臓や手足の働きをコントロールする大事な情報網。つまり、背骨が歪めば、その情報伝達も妨げられてしまうのです。

また、椎間孔という背骨のすき間からは、末梢神経が体中に伸びています。そこが狭まると、肩や腕、脚などに痛みやしびれを引き起こします。

「腰から足にかけて痛む」「指先がピリピリする」そんな症状の多くは、背骨が関係しているのです。

●姿勢の崩れが背骨を壊す

では、なぜ背骨にトラブルが起きるのでしょうか？ 実はその大半が日々の「姿勢」にあります。

たとえば、スマートフォンを見ているときの首。頭の重さはボウリングの玉と同じくらいあるのに、それを前に突き出すような姿勢を毎日続けていたら、首の背骨に大きな負荷がかかります。

また、椅子に座って背中を丸めていると、背骨の前側がつぶされるような力を受け続けます。これが長年蓄積されると、**椎間板ヘルニア**や**脊柱管狭窄症**、**圧迫骨折**など、重い病気へと進行することもあるのです。

つまり、**姿勢の悪さと背骨の歪みは“表裏一体”**。

鏡に映る自分の姿勢は、背骨の状態を映し出す「鏡」なのです。



●背骨を守ることは、未来の自分を守ること

体の痛みがあると、「歳のせいかな」と諦めてしまいがちです。

でも、**姿勢は何歳からでも変えられる**。しかも、わずか1日数分の工夫で未来の健康を変えられるのです。

私がおすすめしているのは、以前この会報誌でも紹介した**「整座」と「キャットレッチ」**というシンプルな姿勢習慣です。これらは、背骨にかかる負担を軽減し、神経の通り道を守る“**背骨のメンテナンス**”と言えます。

「整座」と「キャットレッチ」のやり方は、文末に記載されたQRコードからご覧ください。

歯を磨く習慣がお口の健康を守るように、**姿勢習慣は背骨の健康を守ります**。

人間の体の要——それが背骨です。

「**背骨の健康は、命の健康**」といつても過言ではありません。

背すじがすっと伸びると、不思議と気持ちまで前向きになりますよ。



「整座」のQRコード



「キャットレッチ」のQRコード

「社会科学部同窓会2025」のご案内

従来はホームカミングデーの卒業年次が主体の合同クラス会でしたが、卒業生全体の集まりとした同窓会に形を変え、今年も下記のとおり開催いたします。

ふだん定例会やイベントに開催できない方もふるってご参加の上、縦横の旧交を温めて頂ければと幸甚でございます。

稻門祭の前日の開催にてご多忙の事かと存じますが、何卒ご出席賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

なお、下記のとおり会場が2カ所になりご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう重ねてお願い申し上げます。

日 時：10月18日(土) 14:00～

13:30 受付開始(会場14号館801号室)

14:00～ 同窓会及び奨学生授与式

15:30~17:30 懇親会(会場:A&A CAFÉ)

新宿区戸塚町1-102-11 ニューライフ早稲田 1F

年会費: 3,000円（既に納入いただいている方は不要です）

懇親会費：事前振込 5,000円／人、当日現金払い 6,000円／人

詳細は社学稻門会のHPをご覧の上、参加申込をお願い申し上げます。

<https://syagakutomonkai.com>



編集後記

今回の会報誌制作もバタバタのスケジュールでしたが、寄稿いただいた皆さまのおかげで無事発行することができました。

ありがとうございました。(編集委員の皆さんもお疲れ様でした。)

来年は社会科学部創設 60 周年を迎えます。
学部と稻門会で何ができるか？ できそうか？

と定期的に打ち合わせをしております。
詳細決まり次第お知らせいたします。

• 三九五七 •

編果担当

川端光明 (S54 年卒)	西宮正明 (S57 年卒)
伏見英敏 (S58 年卒)	夏越英成 (S59 年卒)
南雲靖夫 (H2 年卒)	新谷俊樹 (H3 年卒)

発行：「社学稻門会」編集委員会
発行人：早稲田大学社会科学部稻門会
E-mail：info@syagakutomonkai.com
<https://syagakutomonkai.com/>

早稲田大学「社会科学会」 ホームページ

<https://syagakutomonkai.com/>

このホームページでは、「社会科学部卒業生奨学金」制度の概要、基金の収支、活動の近況などを報告しています。また、この運動を支えているOB・OGの会=二水会（毎月第2水曜日に打ち合わせ）の活動、親睦の報告なども紹介しています。なお、この「会報」のバックナンバーについても、今後掲載を予定しているので、ご期待いただければと思います。ぜひ、一度アクセスしてみてください。

「Facebook,X(旧Twitter)」

をご活用ください！

A horizontal row of fifteen red circular markers, evenly spaced, used as a visual scale or reference for the dimensions shown in the diagram.